

Title	ポルトガル語の命令文について
Author(s)	河野, 彰
Citation	大阪外国語大学学報. 59 p.37-p.52
Issue Date	1982-11-08
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80918">https://hdl.handle.net/11094/80918</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ポルトガル語の命令文について

河 野 彰

## Sobre o imperativo em português

por Akira KONO

No português do Brasil, em que a forma “tu” já foi suplantada por “você”, aparecem, no registro informal, as formas como “fecha” “canta” etc. como imperativo, ao lado das formas correspondentes a “você” como “feche”, “cante” etc. Ex. *Canta* a música que você sabe. *Fecha* a porta.

Neste ensaio, apresentaremos a seguinte hipótese acerca das formas como “fecha”, “canta” etc.

1. A gênese destas formas é o modo imperativo. Devido à confusão entre “tu” e “você”, no singular o modo imperativo ficou no paradigma atual do português do Brasil.
2. Devido à identidade morfológica entre o modo imperativo no singular e a 3a. pessoa do singular do presente do indicativo, cujas formas se encontram nas expressões imperativas como “Você *fecha* a porta.” e “Quero que *fecha* (no registro informal) a porta.”, o uso do modo imperativo no singular foi ampliado. Na linguagem atual do Brasil, se usa o modo imperativo em relação ao interlocutor que recebe o tratamento “você” ou “o senhor” em algumas circunstâncias.
3. No plural, não há nenhuma identidade morfológica entre o modo imperativo e a 3a. pessoa do presente do indicativo. Daí, o uso exclusivo das formas subjuntivas como “fechem”, “cantem” etc.

0. 小論は、ブラジル語法研究の一環として、ブラジルのポルトガル語に見られる命令文<sup>(1)</sup>の動詞形式の問題に妥当な説明を与えることを目的とする。従って、ポルトガル語に見い出される各種の命令表現の検討や命令文の派生の問題を直接の対象とするものではない。

1. ポルトガル語の学校文法<sup>(2)</sup>は命令法 (Modo Imperativo) に関して以下のような説明を与えている。

(1-1) 命令法は本来の二人称代名詞単数 (tu), 複数 (vós) に対する肯定命令のみの形式を持つ。

(1-2) いわゆる pronomes de tratamento indireto<sup>(3)</sup> (以下 PTI) に対する命令文には接続

法現在三人称単数、複数の形式を用いる。

(1-3) 否定命令には, *tu, vós* 及び PTI とともに接続法現在形を用いる。

(1-4) 命令法の動詞の形式は、共時的には直説法現在二人称単数、複数それぞれの語末の *-s* を落して得られる<sup>(4)</sup>。その結果、命令法単数は直説法現在三人称単数と形態的には同一である。

以上を動詞 *cantar* (歌う) を例にとってまとめると次のようになる。

(1-5) 肯定命令

単 数: *canta* (*tu*)      *cante* (PTI)

複 数: *cantai* (*vós*)      *cantem* (PTI)

否定命令

単 数: *não cantes* (*tu*)      *não cante* (PTI)

複 数: *não canteis* (*vós*)      *não cantem* (PTI)

2. 命令文とは、そもそも話し手（一人称）が聞き手（二人称）に対して発するものであるから、表層に二人称代名詞が現われていなくても、深層の主語として二人称代名詞を持っていると仮定することができる。ところがポルトガル語においては、英語 *you* とは異なり、聞き手を本来の二人称代名詞 *tu, vós* で指し示すか、PTI でもって指し示すかにより異なる動詞の形式が出現する。このことは単に命令文に限らず全ての法と時制においてあてはまる。例えば、*Tu cantas* (君は歌う)、 *você canta* (同上) のように、聞き手を *tu* で指し示せば、動詞は二人称の形式 *cantas* を取り、PTI のひとつである  *você* を主語に取れば動詞は三人称の *canta* が現われる。このことから、しばしば PTI に関し「意味は二人称で、文法上は三人称」といった説明がなされる<sup>(5)</sup>。ポルトガル語の命令文において、単数、複数の区別の他に、同一の聞き手に対して *canta, cante* (肯定命令の場合) という二つの異なる形式が用いられるのは、もっぱら聞き手を指し示す主格人称代名詞との文法上の一致の問題に過ぎない。

ところで、同じ意味をもつ命令文 (2-6)、(2-7) に関し、命令法の形式を用いた (2-6) よりも、接続法を用いた (2-7) の方がより「ていねいな命令」であるとする考え方がある<sup>(6)</sup>。しかしこれには問題がある。

(2-6) *Carolina, fecha a porta.* (カロリーナ、ドアを閉めておくれ。)

(2-7) *Carolina, feche a porta.* (同上)

(2-6) と (2-7) の差は、前者では聞き手である *Carolina* を *tu* で指し、後者では、例えば、PTI のひとつである  *você* で指し示しているということにある。(2-6) では *tu* に対応して *fecha* という形式が用いられ、(2-7) では  *você* に対応して *feche* が選ばれたというに過ぎない。

「接続法はていねいな命令を表わす」という誤解を生んだ背景には、恐らく次のような事が関係

していると思われる。すなわちポルトガル語には聞き手を敬称である *Vossa Excelência* や *o senhor* 等で指し示した場合、命令文には、*fecha* ではなく *feche* を用いなければならないという文法上の規則がある。つまり *fecha* は *tu* のみを予想させるが、*feche* は *Vossa Excelência*, *o senhor* 等をも予想させるのである<sup>(7)</sup>。ところで、ブラジルのポルトガル語では PTI のひとつである *você* が敬称の意味を失って、*tu* の意味領域に侵入し、ブラジル北部と南部（特に Rio Grande do Sul 州）の限られた地域を除いて、主格人称代名詞の *tu* に取って代ったという事情がある<sup>(8)</sup>。従って主格人称代名詞 *tu* が用いられないブラジルの諸地域<sup>(9)</sup>では、*feche* のような形式は *Vossa Excelência* 等の敬称の他、親称としての *você* をも予想させるので、*feche* が *fecha* との対立で、必ずしも「ていねいな命令」を表わすとは言えない。またポルトガル語に PTI が出現する前の段階では、単数の敬称として *vós* が用いられていたが、その時は命令法二人称複数が単数に用いられていた。以下の Gil Vicente の用例を参照。

(2-8) (貴族 Fidalgo が天使 Anjo に向って)

—*Levai-me desta ribeira*— (この川岸から私を連れて行って下さい。)

(2-9) (悪魔 Diabo が貴族 Fidalgo に向って)

—*Ora, senhor, descansai, passeai e suspirai*; (さあ、休息をとり、その辺を歩き回り、嘆き悲しむがよい。)

—*Auto da Barca do Inferno*—

この時代のポルトガル語では、*leva* が *tu* を予想させ、*levai* が *vós* を予想させる故に、前者より後者がより「ていねいな命令」と言えるかもしれない。しかしいずれにしても、「ていねいな命令」という概念は命令文が深層に主語としてどのような形式を取るかということにかかわる問題であって、命令文に出現する動詞の形式が命令法か接統法かということとは直接には関係がないものと思われる<sup>(10)</sup>。

3. ここではポルトガル語の待遇表現と命令文の関係を簡単に見ておこう。ポルトガル語の二人称代名詞は、およそ次のような段階を経て現在に至っている<sup>(11)</sup>。

(3-1) ~14世紀

- a. 単 数    *tu*            (親 称)
- b. 単 数    *vós*            (敬 称)
- c. 複 数    *vós*            (中立形)<sup>(12)</sup>

命令文に関しては、動詞 *cantar* を例にとれば以下の形式を取ったものと考えられる。

- (3-1') a. *tu* → *canta* (肯定)      *cantes* (否定)
- b. *vós* → *cantai* ( // )      *canteis* ( // )
- c. *vós* → *cantai* ( // )      *canteis* ( // )

この段階では、フランス語の命令法 *chantez* が数に関してあいまいであるのと同じく、単数（但し敬称）と複数に同じ語形が用いられていた。

(3-2) 15世紀～18世紀前半

- a. 単 数    *tu*                    (親 称)
- b. 単 数    *vós*                    (敬 称)
- c. 単 数    *vossa mercê, vossa alteza, vossa excelência etc.* (敬 称)
- d. 複 数    *vós*                    (中立形)
- e. 複 数    c. の複数形 (敬 称)

この段階では一連の PTI の出現により、肯定命令にも接続法の形式が現われる。

- (3-2') a. *tu* → *canta* (肯定)        *cantes* (否定)  
 b. *vós* → *cantai* ( // )        *canteis* ( // )  
 c. *vossa mercê etc.* → *cante* ( // )        *cante* ( // )  
 d. *vós* → *cantai* ( // )        *canteis* ( // )  
 e. *vossas mercês etc.* → *cantem* ( // )        *cantem* ( // )

ここでは PTI の出現に伴って命令文の動詞もより複雑になっていく様子がわかる。

(3-3) 18世紀後半～

- a. 単 数    *tu*                    (親 称)
- b. 単 数    *vossa mercê* 等の他に一連の *o senhor, o senhor Dr., o pai, o António* 等、名詞を用いた *tratamentos nominais* が発達する。(敬称～ていねい形)
- c. 複 数    *vós*                    (中立形一但しその使用は時代とともに減少する)
- d. 複 数    b. の複数形 (敬称～ていねい形)

この段階で重要なことは、Brown & Gilman (1960) の説くように、待遇の原理が「目上」対「目下」という対立から「親」、「疎」という対立を基準にするようになったことである。従って *o senhor* 等の形式は敬称というよりは、むしろていねい形と考えた方がよい。敬称と異なり、ていねい形は必ずしも自分より地位が上の者に用いるとは限らないのである。

命令文に関しては次の通り。

- (3-3') a. *tu* → *canta* (肯定)        *cantes* (否定)  
 b. *o senhor etc.* → *cante* ( // )        *cante* ( // )  
 c. *vós* → *cantai* ( // )        *canteis* ( // )  
 d. *os senhores etc.* → *cantem* ( // )        *cantem* ( // )

現代のポルトガルでは二人称複数代名詞としての *vós* はほとんど用いられなくなった。また PTI のうち *vossa excelência* 等の形式はその使用範囲が制限されるに至り、*o senhor* 等の *tratamentos nominais* がより一般化した。また *vossa mercê* から派生した *ocê* は代名詞として固定化し、ポルトガルでは、目上から目下、または同等の者の間で用いられる代名詞となったが、*tu* とは異なり、そこには「親密さ」を感じさせない<sup>(13)</sup>。このような点を考慮にいれて (3-3) を書き改めると (3-4) のようになるものと思われる。

(3-4) 現代 ポルトガル

- a. 単 数    *tu*                    (親 称)
- b. 単 数    *você*                (註13参照)
- c. 単 数    *o senhor etc.* (敬称～ていねい形)
- d. 複 数    *vocês*                (親 称) <sup>(14)</sup>
- e. 複 数    c. の複数形    (敬称～ていねい形)

従って命令文に関しては次の通り。

- (3-4') a. *tu*    → *canta*    (肯定)        *cantes*    (否定)  
 b. *você* → *cante*    ( // )        *cante*    ( // )  
 c. *o senhor etc.* → *cante*    ( // )        *cante*    ( // )  
 d. *vocês* → *cantem* ( // )        *cantem* ( // )  
 e. *os senhores etc.* → *cantem* ( // )        *cantem* ( // )

また現代のブラジルでは、一部地域を除いて *você* が *tu* に取って代ったという事実があり、また複数の *vós* はポルトガル同様、用いられなくなったので、(3-5), (3-5') の如き体系を持つものと考えてよい。

(3-5) 現代 ブラジル

- a. 単 数    *você*                    (親 称)
- b. 単 数    *o senhor etc.* (敬称～ていねい形)
- c. 複 数    *vocês*                (親 称) <sup>(15)</sup>
- d. 複 数    b. の複数形    (敬称～ていねい形)

- (3-5') a. *você* → *cante*    (肯定)        *cante*    (否定)  
 b. *o senhor etc.* → *cante*    ( // )        *cante*    ( // )  
 c. *vocês* → *cantem* ( // )        *cantem* ( // )  
 d. *os senhores etc.* → *cantem* ( // )        *cantem* ( // )

(3-5') に見られるように、現代ブラジルのポルトガル語では *tu* と *vós* が、いわば「死んだ代名詞」となったために、形態上は命令文から命令法の形式が「退場」したかたちになり、すべ

て接続法の形式が用いられることになった。

4. ところでブラジルの話し言葉に見い出される命令文には上の説明と矛盾するような言語事実がある<sup>(16)</sup>。これをまとめると、概略、次のようになるう。

(4-1) Carolina, *canta* a música que *você* sabe. (カロリーナ、お前の知っている歌を歌ってごらん) に典型的に見られるように、主語となる人称代名詞は *tu* ではなく、*você* である<sup>(17)</sup>。

(4-2) 形態面では *tu* に対する命令法の形式と同一である。(言い換えれば、直説法現在三人称単数と同一である。)

(4-3) Carolina, *não fecha* a porta. (カロリーナ、ドアを閉めないでくれ。) に見られるように、否定命令にも、肯定命令と同一の形式が用いられることが多い<sup>(18)</sup>。

(4-4) もっぱら単数のみに用いられる。従って複数(3-5') *c* にあげた形式が用いられる<sup>(19)</sup>。

(4-5) 以下の a. b. はほぼ同義であるが、register<sup>(20)</sup> の観点からは次のような差がある。

a. Carolina, *cante* a música que *você* sabe.

b. Carolina, *canta* a música que *você* sabe.

Azevedo (1976) によれば、話し手が聞き手に対して、a. を用いれば、より形式的(mais formal) になり、b. に比べれば親密さ(intimidade) を余り表わしていないことになる<sup>(21)</sup>。従って、例えば自分の子供に話しかける時などは、もっぱら a. よりも b. が用いられると考えてよいであろう。

ところで、(4-1) で b. の形式(*canta*) が用いられる場合、主語になる人称代名詞は *tu* ではなく *você* であると述べたが、他方、ブラジルのテレビで放映されている telenovela (日本のいわゆる連続テレビドラマ) の dialogue を corpus としてブラジルのポルトガル語の待遇表現を研究した Jensen (1977) は、主語となる人称代名詞が *o senhor* であっても、命令文には b. の形式が用いられている例をあげて、待遇表現の選択基準(すなわち聞き手を *você* で指すか、*o senhor* で指すか)と、命令文でどちらの形式を選択するかということとは相互に関係がないと述べている<sup>(22)</sup>。さらに続けて Jensen は命令文の形式選択には、部分的には会話の場面が関与していると述べ、彼の調査した corpus のうち命令文に接続法が用いられたのは、ドラマに登場する人物の中で、日頃から形式ばった話し方をする神父と、主人公たちが非常に真剣な話し合い(conversa séria) をした場面であると述べている<sup>(23)</sup>。

以上のような Azevedo, Jensen 及び Thomas (註21参照) の観察から、とりわけ Jensen の言明を考慮にいれて、われわれはおよそ次のような結論を下せるものと思われる。

(4-6) a. 待遇表現の選択はもっぱら聞き手に対する話し手の心的距離(Communicative Distance)<sup>(24)</sup> によって決定される。

- b. 命令文の形式（例えば *cante* 対 *canta*）の選択は、もっぱら発話の場面に依存する。

話し手、聞き手間の人間関係はひとたび固定化すると容易には変化しないと考えられるので、同一の相手には同一の待遇表現が続けて用いられるものと思われる<sup>(25)</sup>。一方、命令文では二つの形式が同一の聞き手に対して、ほとんど interchangeably に用いられる例が見られるのはもっぱら場面や状況に依存している故であろう。

5. (4-1) に見られる *canta* のような形式をどのように説明すべきであろうか。(1-4) で述べた通り、命令法単数と直説法現在三人称単数とは形態面では同一であるので<sup>(26)</sup>、諸家の説はこれら二つのいずれかに分れるのは当然である。命令法とする者は、友田 (1978) p. 161, Dunn (1930) p. 502, Thomas (1969) p. 178, 同 (1974) p. 25 などであり、直説法とする者は、Abreu & Rameh (1971) p. 195, Vázquez Cuesta & Mendes da Luz (1980) p. 133, Melo (1971) p. 101<sup>(27)</sup>, Stavrou (1973) p. 93 等がある。

命令法だとする Thomas (1969) は次のように述べている。

“In regions in which the old second person singular (すなわち *tu*—引用者註) survives, the imperative is still in use with the subject *tu*. However, the simplicity of the form has caused it to survive even where the rest of the old second person has been lost. (...) The entire second person plural is lost everywhere in Brazil, the imperative along with the other forms.”<sup>(28)</sup>

この Thomas の考え方に対しては、1) 何故、命令法単数のみが生き残ったか、2) 何故、否定命令にも命令法が用いられるのか、というような疑問が生じる。

次に直説法説のうち Stavrou (1973) を見てみよう。

“...the Brazilian, instead of *traga-me uma cerveja* says *você me traz uma cerveja*. Dropping the *você* leaves the seemingly ungrammatical *me traz uma cerveja*, which in the spoken language of Brazil has almost entirely replaced the subjunctive to express commands. I don't doubt that this now has the force of an imperative.”<sup>(29)</sup>

Stavrou (1973) は非常に短い論文の中で、命令文以外にも多くの事項を扱っているので、この問題についての記述は詳細ではない。しかし彼の直説法説には次のような利点がある。1) 何故、否定命令にも、肯定命令と同一の形式が用いられるのかの説明はつく。例。Você não *me traz* uma cerveja → Não *me traz* uma cerveja. 2) o senhor が使われる場合にもこの形式が出現する理由の説明もつく。例。O senhor *me traz* uma cerveja. → *Me traz* uma cerveja. ただし、3) 主語となる人称代名詞を削除するだけで命令文が得られるならば、何故、複数形は出現の頻度が少いかの説明ができない。4) 何故、直説法の形式がより informal な register で用いられるかの説明ができない。



両者の中間の見解をとるのが Câmara (1978) である。

“Na língua popular do Brasil, aparece no imperativo, por vulgarismo, a forma de 2a. pessoa no tratamento indireto de *você* (ex.: *apanha seus livros, meu filho!* - ; ou melhor, a interferência da forma indicativa, que mostra a ordem disfarçada em pedido; ex: *Você me dá isso?*!)”<sup>(30)</sup>

「ブラジルの民衆語には PTI である *você* に対し、誤用により、命令法の動詞が現われる。(例. 本をとりなさい。——あるいはまた、これは命令を依頼にやわらげた *Você me dá isso*——私にそれを下さいますか——の直説法の形式からの類推 (interferência) であるかもしれない。」

Câmara (1978) は命令法単数の形式が直説法現在三人称 (*você* に対応する) と形態面で同一であることに注目して、このような形式が聞き手に「親密な」感じを与える理由を、命令表現のひとつである直説法現在を用いた平叙文に求めている。

6. ここでは、上の問題との関連で、諸々の命令表現のうち直説法現在を用いた場合を取りあげてみよう。

Cunha (1975) によれば (6-1) は、命令文に比べて、その命令調がやわらぐという<sup>(31)</sup>。

(6-1) O senhor me traz o dinheiro amanhã. (明日、お金を持ってきて下さい。)

また (6-2) に比べれば、(6-1) は主語が強調されていて、対比的な意味を持つことになる。

(6-2) Traga-me o dinheiro amanhã.

(6-2) が単に「お金を持って来なさい。」という意味をもつならば、(6-1) は「他の誰でもない あなた がお金を持って来なさい。」ということになる<sup>(32)</sup>。

同じく、Cunha (1975) によれば、命令を発する者 (すなわち話者) の意向を強調したい時は (6-3) のように命令を表す動詞が顕在化するという<sup>(33)</sup>。

(6-3) Ordeno-te que me respondas. (私は君に返事をするように命じる。)

ところで (6-3) は、話者の意向が強調されているという点を除けば、ほぼ (6-4) と同義と考えられる。

(6-4) Responde-me.

このことから、しばしば問題にされる接続法と命令法の形態面の差は次のように説明されるであろう。(6-5) が非文であるところから、命令法と接続法のそれぞれの動詞は、その生じる環境に関しては相補分布をなしているものと考えられる。

(6-5) \*Ordeno-te que me responde. (命令法)

一方、PTI に対する命令文、及び否定命令には、(6-3) の従属節中に現われたものと同じ形式 (すなわち接続法) が生じる。

- (6-6) a. *Responda-me.* cf. *Ordeno-lhe que me responda.*  
 b. *Não me respondas.* cf. *Ordeno-te que não me respondas.*

従って、形態論上の観点からは、(3-3') からもわかるように、tu, vós に対する命令法の形式は有標 (marked) であり、接続法の形式は無標 (unmarked) ということになる。

さらに Melo (1970) によれば、ポルトガル語は希求法 (optativo) 独自の形式を欠いているので接続法及び命令法の形式が願望、祈願等を表わすということであるが<sup>(34)</sup>、このこともまた接続法と命令法の動詞の形態上の差は、互いに対立するものではなく、それぞれ主語との一致の結果であること、また、起りうる環境の違いに由来していることを示している。以下の文を参照。

- (6-7) a. *Espero que tu sejas feliz.* (君が幸せであることを望む.)  
 b. *Espero que você seja feliz.*  
 c. *Que sejas feliz.*  
 d. *Que seja feliz.*  
 e. *\*Sejas feliz.*  
 f. *Sê feliz.*  
 g. *Seja feliz.*

ところで (6-1) のような平叙文は祈願の意味を持たない。

- (6-8) a. *\*Tu és feliz.*  
 b. *\*Que és feliz.*  
 c. *\*És feliz.*

このことから、(6-1) のような平叙文が命令の意味を持つのは、むしろ、そのイントネーションや発話の状況に負うところがあり、語用論上の問題として扱うべきものであろう。

7. 先の (6-3), (6-4) 等のパラフレーズ関係を考慮に入れて、全ての命令文 (また恐らくは祈願文) も、およそ (7-1) のような基底構造から導かれるとする、いわゆる執行分析の考え方をとる立場がある<sup>(35)</sup>。cf. Abreu (1977), Faria (1973)

- (7-1) *Eu ORDENAR te [tu responder me].*

またいわゆる祈願文は、執行動詞が [+ordem] の代りに、例えば [+volitivo] のような feature を持ち、従属文の主語は必ずしも二人称に限定されない、というような構造を設定できる<sup>(36)</sup>。

ところで、(6-3), (6-4) 等とは異なり、このようなパラフレーズが成立しない動詞もあることは注目に値する<sup>(37)</sup>。

- (7-2) a. *Espero que você goste do bolo.* (君がそのお菓子を気に入るといいのだが.)  
 b. *\*Goste do bolo!* (そのお菓子を気に入れ)

- (7-3) a. Quero que você deteste Paris. (君がパリを嫌うように望む)  
 b. \*Deteste Paris! (パリを嫌え)

しかしながら、執行分析に従えば、(4-1) から (4-5) に示したようなブラジルのポルトガル語に見られる現象をうまく説明できるように思われる。Wherritt (1978) によれば、ブラジルのポルトガル語における接続法の用法は、話し手の年齢、教育程度、階層、また発話の場面などと相互関係にあるという<sup>(38)</sup>。従って (7-4) は、informal な register では (7-5) の如くなるものと思われる。

- (7-4) a. Quer que eu *faça*? (私にしてもらいたい?)  
 b. Ele não quer que *faça* isso. (彼はそんなことをして欲しくない)  
 c. Quero que *ponha* isso lá. (それをそこに置いてちょうだい)
- (7-5) a. Quer que eu *faço*?  
 b. Ele não quer que *faz* isso.  
 c. Quero que *põe* isso lá<sup>(39)</sup>.

同じく Wherritt (1978) によれば<sup>(40)</sup>、主文に *querer* などの命令や願望を表わす動詞 (verbs of volition) をもつ文では、過去時制に比べて、現在の方が、直説法が出現する率が高いという。以下の例を参照。

- (7-6) a. Quero que *desce* essa rua. (その通りをずっと行って下さい。) cf. Desce essa rua.  
 b. O professor queria que eu *fizesse*. (先生は私にそれをして欲しかった。)

すなわち、a. に対し、b. では、主文の主語の意思が実行されたかもしれないし、また実行されなかったかもしれないわけである。むしろ主語の意向が果たされたか否かという結果の方に焦点が移っているものと思われる。

また執行分析をとらない立場<sup>(41)</sup>にたっても、すなわち、別々の基底構造からそれぞれ *Quero que desça/desce essa rua.* と *Desça/Desce essa rua* の二つの文を導こうとも、すでに述べたように意味的には、ほぼ同じことを表わしていると考えられるので、接続法の代りに直説法が生じるという、接続法の用法全般に見られる現象が、命令文に生じる可能性も十分に考えられる。

このような点を考慮して、Abreu (1977) は、(4-1) から (4-5) の現象を、執行分析の立場から次のように説明している<sup>(42)</sup>。

- (7-7) a. ポルトガル語の命令文の基底構造は概略、次のようなものである。
- $$\left\{ \begin{array}{l} \text{Quero} \\ \text{Ordeno} \\ \text{Peço} \end{array} \right\} \text{que você faça isso.}$$
- b. informal な register では接続法の代りに直説法が出現する。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{Quero} \\ \text{Ordeno} \\ \text{Peço} \end{array} \right\} \text{ que você } \textit{faz} \text{ isso.}$$

- c. 上位文の主語、動詞、complementizer の que を消去し、随意変形規則で従属文の主語 você を消去すれば命令文 *Faz isso!* が得られる。

この分析の利点は、肯定命令にも否定命令にも同一の形式が出現することや、register の観点からの差異をうまく説明できるものと思われる。しかし複数の *Façam isso!* が可能なのに *\*Fazem isso!* が不可能な理由を説明していない。

cf. *Quero que vocês façam isso.* → *Quero que vocês fazem isso.*

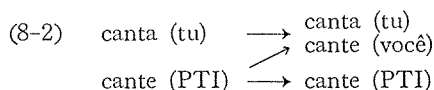
8. これまで、(4-1) の *canta* のような形式に関して、命令法説 (Thomas 1969), 直説法説 (Stavrou 1973), 執行分析説 (Abreu 1977) を検討してきたが、(4-1) から (4-5) までの全ての現象を説明するためには、どれも一長一短があった。そこで、われわれは Câmara (1978) の線に沿ったひとつの仮説を提出したい。

現代ポルトガルの待遇表現の用いられ方を見ると、*tu-você-o senhor* という三項対立をなしていることがわかる。一方、現代ブラジルでは、*você-o senhor* という二項対立をなしている<sup>(43)</sup>。すなわち、ブラジルではすでに述べたように、親称である *tu* が PTI のひとつである *você* (< *vossa mercê*) に取って代られたという事実がある。この変化は、いわば親称の表現手段の変化であるが、*você* の属すパラダイムが *tu* の属すパラダイム全体に取って代ったとは考えられない理由がある。すなわち、ブラジルのポルトガル語では、主格を除く他の対格、与格などに相変らず *tu* のパラダイムに属す形式が出現する事実があるからである<sup>(44)</sup>。次の用例を参照。

(8-1) *Ai! Dindi/Se algum dia/Você for embora/Me leva contigo, Dindi/Olha, Dindi, fica, Dindi—"Dindi" por A. C. Jobim & A. Oliveira (ああ, ジンジ, もしいつの日か, 行ってしまうのなら, 一緒に連れていっておくれ, ねえジンジ, 行かないでおくれ)*

(8-1) に典型的に見られるように、主格が *você* に取って代った他は、全て *tu* のパラダイムに属す形式ばかりであり、また命令文にも *tu* に対応する命令法の形式と思われるもの (例 *leva, fica*) が出現している。従って、少なくとも話し言葉においては、主格のみの交替という、いわば不完全な交替ではなかったかと考えられる<sup>(45)</sup>。また (3-1) から (3-5) までの待遇表現の変遷とそれに対応する命令文の形式 (3-1') - (3-5') を見ると、例外はあるにしても、大体、命令文は深層の主語である二人称代名詞の種類 (親称、敬称など) に対応して、それぞれ別の形式をもっていたことがわかる。ところが (3-5') に見られるように PTI のひとつである *você* が *tu* に取って代れば、命令文の形式は親・疎の別なく全く同一の形式になってしまう。そこで話し言葉のレベルでは、親称に対する命令文で、*tu* に対応する形式と *você* に対応する形式の間に形態

上の「揺れ」(oscillation)があったのではないかと考えられる。以上をまとめると (8-2) になるう。



ちなみに, tu がいまだに保たれているブラジルの南部, 北部の一部地域でも, 待遇表現は一般に二項対立 (tu 対 o senhor) をなしており, 親称の表現手段として você は用いられない。ブラジル全体を見ると, tu と você は, いわば相補分布をなしており, 主格に você が用いられる地域では tu は使用されず, 逆に tu が用いられる地域では você は使われないということになり, 両者に意味上の差異はない。従って命令文に形態上の「揺れ」が生じたことは十分に説明のつくことであると思われる。

ところで, ポルトガル語においては命令法単数と直説法現在三人称単数は, ser を唯一の例外として, 形態上は同一であるという事実がある。また種々の命令表現のうち, 直説法現在を用いた平叙文は「命令」「依頼」「勧告」など, 命令文とはほぼ同じ意味を持ちうという事実がある。(cf. Stavrou 説) さらに「命令」や「願望」などを表わす ordenar, querer などの従属節中に現われる動詞は informal な register では接続法ではなく直説法が出現するという事実もある。(cf. Abreu 説) (8-3) を参照。

- (8-3)
- a. *Fecha* a porta.
  - b. *Você fecha* a porta.
  - c. *Quero que fecha* a porta.

a. では, você で指し示す聞き手に対しても, 上で述べたように, tu と você の混同から tu に対応する命令法単数が, いわば「誤用」として用いられたものと考えられる。b., c. は文法上の一致を破ることなく você に対応しているが, 意味上は a. とほぼ同義である。そこで a. の fecha のような形式は, b. c. の直説法現在からの類推により, 単なる「誤用」の域を越えて, より安定した形式へと変化したのではないだろうか。また敬称 (ないしは, ていねい形) の o senhor などで指し示す聞き手に対しても, informal な register では, fecha のような形式が用いられる事実も, b., c. からの類推によるのではないだろうか。また否定命令にも同一の形式が用いられる事実は, b., c. では否定の場合も, 肯定と同一形式, すなわち fecha を用いる事実からの類推によるのではない。一方, 複数では, vós に対応する命令法複数, vocês などに対応する直説法現在三人称複数と形式を異にするので, 単数で生じた類推ははたらかなかったのではないだろうか<sup>(46)</sup>。(8-4) 参照。

- (8-4)
- a. *Fechai* a porta. (vós に対応)
  - b. *Fechem* a porta. (vocês などに対応)

c. Vocês fecham a porta.

d. Quero que fecham a porta.

現代のブラジルのポルトガル語は、命令文には少くとも話し言葉において、(3-5')とは異なり、単数に二つ (fecha, feche) 複数にひとつ (fechem) の形式をもつものと考えられる<sup>(47)</sup>。その使い分けは待遇表現とは異なり、もっぱら場面などに依存するものと思われる。

結論として、われわれは fecha のような形式は命令法単数をその起源とするが、直説法現在三人称単数からの類推により、その使用範囲を拡大したものと解釈する。それは、もっぱら命令法単数と直説法現在三人称単数は形態上、同一の形式をとることに負うものであろう<sup>(48)</sup>。

(1982. 6.)

#### 〔註〕

- (1) 小論では命令文と命令法を区別して用いる。命令法という用語は、もっぱら形態論上の問題として扱う。
- (2) 例えば Cunha (1975) p. 263 参照。他の文法書も概ね Cunha と同様の説明を与えている。ポルトガル語の命令表現一般に関しては Cunha (1975) p. 325-29 の記述を参照。
- (3) Pronomes de tratamento indireto (PTI) とは、Vossa Excelência, Vossa Senhoria, o senhor, você (<vossa mercê) など、元来、名詞から派生した一連の代名詞を指し、動詞は三人称の形式をとる。池上 (1974) p. 19-20 参照。
- (4) 唯一の例外は ser で、命令法はそれぞれ sé (tu), sede (vós) である。また dizer, fazer, trazer 及び -uzir で終る動詞は、単数では、命令法は語末の -e を落とすのが普通である。例 dize→diz, faze→faz. Cunha (1975) p. 263 参照。
- (5) この問題は池上 (1974) が説くように、「人称」と「称格」という異なる概念を導入することによって解決される。詳しくは池上 (1974) 参照。
- (6) 例えば佐野 (1978) p. 215, 星 (1966) p. 304-5
- (7) 池上 (1974) p. 33 参照。
- (8) ブラジルにおける tu の用法に関しては、Kono (1979) 参照。
- (9) Rio de Janeiro, São Paulo 等の大都市を含むこれらの地域で話されるポルトガル語をブラジルでは一応、標準語 Português Padrão と見なしているようである。
- (10) 小論では取り扱わないが、「ていねいな命令」は他の諸々の命令表現によって表わすことができる。Studerus (1978) はスペイン語を対象としてこのような問題を扱っている。
- (11) Cintra (1972) p. 127-9 参照。
- (12) ここでは Cintra (1972) p. 127 のいう、forma indiferente の訳語として用いる。この段階では、複数には親称、敬称の対立がなかったものと考えられる。
- (13) Cintra (1972) p. 14, 河野 (1978) p. 31 註 7 参照。ブラジルで用いられる você に対し、ポルトガル語の você は (—superior) (—solidarity) のような feature を持つものと考えられる。
- (14) 現代のポルトガル語では vós が使用されなくなるにつれて、tu の複数には vocês が使用されるようになったものと思われる。また複数には(3-4) c. の複数形が敬称・ていねい形として用いられるので、vocês の使用範囲はこれらとの対立で親称複数のみに限定されるものと考えられる。
- (15) 但し、ブラジルでは、複数に関しては中南米のスペイン語同様、親称・敬称 (ていねい形) の対立が解消し、vocês が中立形となる傾向が見られる。Head (1976) p. 335 参照。

- (16) すでに多くの文法家、言語学者によって指摘されている。詳しくは河野 (1978), Kono (1978) 及びその bibliography 参照。
- (17) 但し o senhor などに対して用いられることもある。註22参照。
- (18) tu に対する否定命令は não feches である。統計的には, *fecha* のような形式が否定命令に出現する率は肯定命令に比べれば少いようである。Jensen (1977) p. 64 参照。
- (19) 複数に関して Thomas (1969) p. 180 は次のように述べ, (i)から(v)の例文をあげている。

“In certain verbs which have monosyllabic third person plural forms in the present indicative, these forms are popularly used as imperatives. As in the singular, the criteria of distinguishing imperative from indicative are the tone of voice and the omission or use of subject pronouns.”

- i) Meninos, têm juízo. (坊やたち、聞き分けよくしなさい。)
- ii) Vêm todos para cá. (みんな、こっちへおいで)
- iii) Dão os cadernos ao professor. (ノートを先生に出しなさい。)
- iv) Vão com Mamãe. (お母さんと一緒に行きなさい。)
- v) Põem os sapatos antes de sair. (外へ行く前にくつをはきなさい。)

ちなみに, (i)–(v) に対する命令法複数それぞれ i) tende ii) vinde iii) dai iv) ide v) ponde である。従って形態面では命令法単数は直説法現在三人称と同一であるが、複数異なることに注目する必要がある。

- (20) register に関しては、石橋他編 (1973) p. 767–8 参照。
- (21) Azevedo (1976) p. 47 註4 参照。また Thomas (1969) p. 178 はやや誇張とも思われる表現で、ブラジルでは b. の形式が広汎に用いられていることを指摘している。また本学客員教授 Carlos Avighi 氏（ブラジル出身）の二人のお嬢さん（7歳と4歳）は姉妹間の会話においても、また両親に話しかける際も、命令文ではほとんど b. 形式を用いているのを観察した。
- (22) Jensen (1977) p. 64 参照。さらに Jensen は -ar, -er, -ir 動詞のいずれであれ、命令文には語尾が -a になる形式を取ろうとする傾向がわずかに見られると述べている。従って -er, -ir 動詞の方が a. の形式（接続法）を取る確率が高いといえそうである。今のところ、われわれはこの問題についてコメント出来ない。今後の課題としたい。
- (23) Jensen (1977) p. 65 参照。
- (24) パン (1975) 参照。
- (25) Jensen op. cit. p. 57 は、corpus に基いて、ひとたび人間関係が決定されると、用いられる待遇表現はほとんど変化しないと述べている。
- (26) スペイン語と異なり、ポルトガル語では ser を除けば、全ての不規則動詞も同一である点に注意。
- (27) ただし、Melo は “formas idênticas às do indicativo presente”（直説法現在と等しい形式）と述べて断定はしていない。
- (28) Thomas (1969) p. 178 参照。また河野 (1978), Kono (1978) ではブラジルのポルトガル語において、você が主格において tu に取って代っても、tu の所有詞 teu/tua, 対・与格形 te が você とともに依然として用いられている点（いわゆる mistura de tratamento）との共通性に注目して、Thomas と同じく canta のような形式を命令法と解釈した。
- (29) Stavrou (1973) p. 93. ただしスペイン語と異なり、ポルトガル語では me traz uma cerveja において、me が traz に前接していることは必ずしも traz が直説法であるという証拠にはならない。ポルトガル語の規範文法では clitic pronoun で文を始めてはいけないという規則があるが、informal な register では頻繁に見られる。この点に関し、スペイン語との差異を指摘して下さった宮本正美氏に感謝します。
- (30) Câmara (1978) p. 142.
- (31) Cunha (1975) p. 327. 一方、直説法未来を用いると（例 Tu irás comigo.）命令調を増すこともあるし、

- またやわらげることもあるという。
- (32) Carlos Avighi 氏の指摘（個人談話）及び Thomas (1974) p. 25.
  - (33) Cunha (1975) p. 328.
  - (34) Melo (1970) p. 285.
  - (35) Ross (1970) 参照.
  - (36) Abreu (1977) p. 7-8 参照.
  - (37) Azevedo (1976) p. 48 参照.
  - (38) すなわち、これらの要素により、規範文法上は接続法が出現すべき環境に直説法が現われる頻度が高くなる。詳しくは Wherritt (1978) 参照。また Azevedo (1976) p. 50-53 もこれらの点に言及している。
  - (39) 例文はいずれも Wherritt (1978) p. 43 のもの。
  - (40) Wherritt (1978) p. 51
  - (41) Azevedo (1976) p. 47-48 参照.
  - (42) Abreu (1977) p. 6-7 参照.
  - (43) (3-4), (3-5) を参照.
  - (44) この現象は “mistura de tratamento” と呼ばれるもので、詳しくは河野 (1978), Kono (1978), Jensen (1977) 等参照.
  - (45) ここでは詳しく扱う余裕はないが、主格に *você* を取りながら、対格、与格などに *tu* のパラダイムに属す *te* が出現する現象は informal な register に限られるようである。従って書き言葉では *você* のパラダイムに属す全ての形式が *tu* のそれに交替したものと思われる。
  - (46) また *ser* も、命令法（単・複とも）と直説法現在三人称（単・複とも）はやはり形式を異にするので、その命令法の使用範囲は拡大せず、*você* に対応する接続法の *seja* がもっぱら用いられたのであろう。
  - (47) 複数がひとつの形式しか持たないということは、親・疎の対立が中和して、*vocês* がいわば中立形となる傾向に関連があるかもしれない。
  - (48) インフォーマントとして御協力いただいた Carlos Avighi 先生に感謝します。本稿の誤りの責任は、もちろん筆者のみにある。

## 引 用 文 献

- Abreu, Antônio Suárez (1977): “Considerações sobre o imperativo e seu emprego em português” in *Revista Brasileira de Lingüística*, vol. 4, no. 1
- Abreu, Maria Isabel e
- Rameh, Cléa (1971): *Português Contemporâneo 2*, Washington D. C.
- Azevedo, Milton M. (1976): *O Subjuntivo em Português*, Petrópolis
- Brown, Roger and Gilman, Albert (1960): “The Pronouns of Power and Solidarity” in Sebeok, Thomas A. (ed.) *Style in Language*, Massachusetts
- Câmara Jr., J. Mattoso (1978): *Dicionário de Lingüística e Gramática*, 8a.ed., Petrópolis
- Cintra, Luís F. L. (1972): Sobre “formas de tratamento” na *Língua Portuguesa*, Lisboa
- Cunha, Celso (1975): *Gramática do Português Contemporâneo*, Belo Horizonte
- Dunn, Joseph (1930): *A Grammar of the Portuguese Language*, London
- Faria, Isabel Hub (1973): “Sobre a formação das imperativas em português” in *Boletim de Filologia*, tomo XXII
- Head, Brian F. (1976): “Social factors in the use of pronouns for the addressee in Brazilian Portuguese” in *Readings in Portuguese Linguistics*, Amsterdam
- 星 誠 (1966): *ポルトガル語四週間*, 東京
- 池上 岑夫 (1974): 「人称と称格—ポルトガル語の場合」*東京外国語大学論集*24



- 石橋幸太郎他編 (1973) : 現代英語学辞典, 東京
- Jensen, John B. (1977): "A investigação de formas de tratamento e a telenovela: *A Escalada*, parte I" in *Revista Brasileira de Lingüística*, vol. 4 no. 2
- 河野 彰 (1978) : 「ブラジル・ポルトガル語における対称詞と動詞の命令法について」 南欧文化 5.
- Kono, Akira (1978): "Mistura de formas de tratamento e o modo imperativo no português de Portugal e no português do Brasil" in *Anais XII*
- (1979): "O tratamento *tu* no português do Brasil" in *Anais XIII*
- Melo, Gladstone Chaves de (1970): Gramática fundamental da língua portuguesa, Rio de Janeiro
- (1971): A língua do Brasil, Rio de Janeiro
- ペ ン, F. (1975) : 「日本人の心的距離」 月刊言語 vol. 4 no. 1
- Ross, John Robert (1970): "On declarative sentences" in *Readings in English Transformational Grammar*, Waltham, Mass.
- 佐野 泰彦 (1978) : 基礎ポルトガル語, 東京
- Stavrou, Cristopher (1973): "Portuguese pronouns and command form" in *HISPANIA* vol. 56, no. 1
- Studerus, Lenard H. (1978): "Obliqueness in Spanish imperative utterances" in *HISPANIA* vol. 61 no. 1
- Thomas, Earl W. (1969): *The Syntax of Spoken Brazilian Portuguese*, Nashville, Tenn.
- (1974): *A Grammar of Spoken Brazilian Portuguese*, Nashville, Tenn.
- 友田 金三 (1978) : ブラジルポルトガル語文法・作文, 京都
- Vázquez Cuesta, Pilar e
- Mendes da Luz, Maria Albertina (1980): Gramática da Língua Portuguesa, Lisboa
- Wherritt, Irene (1978): "Patterns of the subjunctive in Brazilian Portuguese" in *Revista Brasileira de Lingüística*, vol. 5 no. 2